

Advances in Biological Psychiatry Vol. 1 : Minimal
Brain Dysfunction : Fact or Fiction

A.F. Kalverboer ; H.M. van Praag ; J. Mendlewicz (Eds)
S. Karger 1978

本書は、1977年4月 Amsterdam で行われた、Society of Biological Psychiatry 主催の Minimal Brain Dysfunction (以下 MBD) に関するシンポジウムの集録である。

MBD とは、一般に、学齢児で、知能は正常であるが種々の程度の学習や行動の異常があり、それが中枢神経系の微小な機能障害と関係あるものをさしており、多動、注意集中困難、爆発性、気分変動などが行動上の問題として、時間空間認知障害などが学習上の問題として表われる。このような子供が注目をあびるようになったのは教育の分野であり、医学の目でこれを取りあげたのは、Knobloch & Pasamanik (1959) であった。彼らは、損傷の連続性仮説を立て、脳損傷が重症な時には死に至り、非常に軽症の時 MBD になるというのである。その後、沢山の研究がこの方面でなされたが、種々の問題点も明らかになって来た。そして「MBD という診断名は消失すべきである。」という主張も、強く出されている。このシンポジウムはこのような状況をふまえて行われたものである。

はじめに、Kalverboer は、歴史的展望と現在の MBD 研究の紛糾について、又、MBD 概念の有用性を主張する人々と、それを否定する人々との研究を紹介し、結論として彼は、「色々な反論はあるが、MBD といわれるような子供達は現実にいるのであり、更なる研究が進められるべきである。しかし MBD とか多動児というような一般的ラベルは、安易につけるべきではない。」と言っている。これは、この書全体の結論でもあるように見られる。

Yule は、発達心理学からみた評価法の問題点と今後の課題を、Touwen は、神経学的微症状による評価と、これによって診断されたグループの行動療法による治療成績を、紹介してくれた。

Prechtel は、「MBD と神経系の可塑性について」という題で、動物に生後まもなくおこった脳の各部の損傷が、形態学的に再構築され機能的に代償されてゆく様子を述べ、この受傷後の代償機構は多分人間にとっても重要な適応機能であることをみせてくれた。動物実験に関して、G. Smith は、神経薬理学の立場から、MBD の疾患モデルとしての Rat の Ventral Tegmental Syndrome と、Dopaminergic neuron の重要性を強調した。しかし、動物から人間への推論は常に飛躍を伴う。治療薬も Pick が述べるように、理想的なものは今の所ない。最も多く使われるのは中枢神経刺激剤である。

最後に Shaffer は、MBD についてのコントロールされた縦断的研究が必要であることを強調した。今までのわずかな研究の中では、神経学的微症状のある子供の予後は決して楽観できないことをものがたっているが、彼は又、これに社会・家族等の環境的因子が大きく働いている可能性を示した。

このシンポジウムに於て、MBD とは、一つの診断名あるいは一つの病気ではなく、脳機能障害を示唆されるような症状をもった色々な子供達のグループの集まりであることが明らかになった。

この種の本は、最近数多く出版されているが、概念の未だ統一されていない症候群であるだけに、著者によって多少のかたよりがある。

その点本書は、MBD 問題の紛糾について、精神医学、神経学、心理学、薬学、疫学などのこの分野での第一人者が、それぞれの立場から最近の視点を論じており、その豊富な引用文献とあわせて、近年の MBD 論議の集大成ともいえるものである。

110ページほどの小冊子であるが、この分野に興味をもたれる人々には、是非一読をおすすめしたい。

(舟橋満寿子)

[千葉医学 55, 372, 1979]